

東京学芸大学

大学史資料室報

Tokyo Gakugei University Archives journal.



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

vol. 9

目 次

| | |
|---|----|
| 巻頭に寄せて ―2021 年度を振り返りながら― | 2 |
| 川手 圭一（大学史資料室室長・人文社会科学系教授） | |
| 教育者養成大学アーカイブズにおけるサービス・ラーニングの可能性 ―東京学芸大学大学史資料室における取り組みを中心に― | 3 |
| 君塚 仁彦（総合教育科学系教授） | |
| 大学史資料室関連収蔵施設の環境調査を振り返って | 11 |
| 服部 哲則（自然科学系講師） | |
| 創成期の東京学芸大学における学生生活 ―卒業生の語りをもとに | 14 |
| 金子 真理子（次世代教育研究センター教授） | |
| 女子師範学校関係資料 解題 | 22 |
| 牛木 純江（大学史資料室専門研究員） | |
| 大学史資料室の新たな試み ―閲覧スペースの開設および常設展示の開始について― | |
| 牛木 純江（大学史資料室専門研究員） | 27 |
| 令和 3 年度活動報告 | 31 |

巻頭に寄せて

— 2021 年度を振り返りながら —

川手圭一（大学史資料室室長・人文社会科学系教授）

今年度、東京学芸大学大学史資料室は、本学附属図書館増築工事（二期）の完成に伴い、図書館3階に事務室機能を移転して、学生を中心とする学内者にとってより身近な存在となった。これに伴い、新たに活用できることになったスペースにおいては展示のスタイルを再考し、常設展示を開催することとなった。大学史資料室が授業に活用される機会も増え、多くの学生が見学することで、本室の認知度は大いに高まった。詳細は、本号に掲載した牛木純江専門研究員による論考を参照頂きたい。2012年5月に開設して以来、大学史資料室の歩みは、ほぼ10年の節目を迎えつつあるが、これにより、大学史資料室の活動に、新たな1ページが加わることとなったといえよう。ここまで支えてくれた多くの関係者の方々に改めて感謝申し上げたい。

思えばこの2年あまり、パンデミックと化した新型コロナウイルス感染症は、大学史資料室の活動にも様々な負の影響を及ぼした。とりわけ、本室が設立以来の目標としている「国立公文書館等」の指定を受ける準備は、幾多の行動制限により、そのための調査・検討が遅々として進んでいない。

しかし他方で、このパンデミックにあっても、それを乗り越えるために身に着けたさまざまな術を用いながら、新たな可能性をつなぐ活動領域もある。2021年4月より、大学史資料室を支える事務局体制は、総務部学術情報課内に新たに設けられたアーカイブ室アーカイブ係が担うこととなった。この部署は、大学附属図書館が掲げる「知の循環」の中でも、デジタルな学術資料の流通を担っており、所蔵資料のさらなるデジタル化を進めるとともに、「大学史資料室 WEB ギャラリー」「師範学校アーカイブズ」等を活用したデジタルな資料保存・公開を進めていくこととなる。

このように今年度、大学史資料室は、現実の「場」としての常設展示を実現させ、他方では資料の保存・公開をデジタル化していく道筋をつけた。後者については、次年度以降にその成果を『室報』でも紹介していくこととなるが、この両者が両輪のごとく、今後の大学史資料室の活動を進めていくことが期待される。その際、今年度公開した「キャンパスツアー動画」のように学生の協力を得られれば、それは、大学史資料室の活動が学生の教育と繋がっていくという本学ならではの姿を示していくことともなる。その活動と意義については、君塚仁彦室員による本号の論考をご覧頂きたい。

師範学校時代の資料の整理・公開も順調に進んでいる（本号、牛木専門研究員の論考を参照のこと）。本学は、再来年度（2022年度）に創基150周年を迎えるが、これら師範学校時代の史資料の整備は、この150年の歴史を振り返る上で欠くことのできないものとなる。

最後になるが、大学史資料室の資料保存において、専門的知見に立って環境整備に尽力されてきた服部哲則室員が、今年度をもって定年退職される。これまでの服部室員の本室への貢献に敬意を表すとともに、資料保存において、この分野からの支えがいかに重要であるかを、本号の服部室員の論考から汲み取っていただければ幸いである。

教育者養成大学アーカイブズにおけるサービス・ラーニングの可能性

—東京学芸大学大学史資料室における取り組みを中心に—

君塚仁彦（総合教育科学系教授）

1. 大学アーカイブズと教育機能

大学アーカイブズ（University Archives）の基本的機能は、研究教育機関である大学がその活動の過程で作成したり、他から受領したりすることを通じて蓄積された膨大な記録資料を保存・管理・公開、そして調査・研究とレファレンスサービスを行うことにある。

国内の大学アーカイブズは、個々のユニバーシティ・アイデンティティを大切にしてきた私立大学の動きが顕著であり、その動きをリードしてきた事実がある。しかし国内初の大学アーカイブズは1963年に東北大学が設置し、その後、2004年の国立大学法人化、2011年の「公文書等の管理に関する法律」施行後、国立大学も大学アーカイブズに関する動きを活性化させていった経緯がある。国内の大学アーカイブズのフラッグシップ的な存在ともいべき京都大学文書館をはじめ、東北大学、東京大学、名古屋大学、九州大学、広島大学など、帝国大学や高等師範学校の前史を持つ大規模総合大学がその動きをリードしてきたが、その後、専門学校や師範学校としての前史を持つ国立大学、例えば、小樽商科大学や京都教育大学、東京外国語大学でアーカイブズが設立されるなど動きが広がり、東京学芸大学大学史資料室もその動きに連なるものと位置づけられる。

国立大学は、自らの存在意義や教育研究活動の社会的意義等について具体的な説明が求められるようになってきているが、これは大学アーカイブズにも当てはまる。前述した大学アーカイブズの機能充足はもちろん、今後は、日本が提唱するSociety5.0を目指す動きの中で急速に進むデジタル化への対応、大学経営、情報公開や企画立案、職員研修、危機管理などでの積極的活用、そして何よりも学部・大学院の教育活動に積極的に寄与していくことが求められている。

大学アーカイブズにおける教育活動は、本来的な基幹業務ではない。しかし、普及活動の一環として大学史編纂の延長線上での自校史教育の文脈で語られることが多く、現場のアーキビストによる初年次教育としての実践例が蓄積されている。

国立大学では学内でアーカイブズの存在そのものが十分に認識されず、教職員や学生による活用が十分になされていないケースも見られる。そのため関係者の間では、学内外の理解者や利用者を育て、増やしていくためにアーカイブズそのものの普及が重視されてきたとともに、学部・大学院教育における教育活動についても注目されてきた経緯がある。¹

このような流れの中で、アーカイブズそのものの普及のための大学教育が必要不可欠であるという認識は関係者の間でほぼ共有されてきた。しかし、大学アーカイブズの教育的役割は、資料紹介や展示活動、また、従来型の教育方法による自校史教育をはじめ、歴史学や記録管理学、図書館情報学等との授業連携やアーキビスト養成教育だけではない。特に、本学のような学校教員や教育支援者養成を目的とする教育者養成大学のアーカイブズは、学生をはじめとする利用者、あるいは大学が位置する地域社会や学校との間の「双方向的な学びの空間」を創造する可能性を追求すべきではないかと思われる。²

本稿では、以下、教育者養成大学ならではの学部授業との連携事例を紹介していくことにするが、実践にあたって筆者が強く意識したのがサービス・ラーニングという考え方である。サービス・ラーニング（Service-

Learning) とは、教育活動の一環として、地域社会、コミュニティにおける市民性 (Citizenship) を育成、向上させることを主な目標に掲げ、教科学習とコミュニティにおける貢献的活動を統合することによって開発される学習方法を指す。サービス・ラーニングとは、学生が教室で得た知識を、地域社会での貢献活動で展開することを通して学びを創造することであり、学習者と地域社会が連帯することで双方に有意の利益がもたらされることが考えられている。一般的にサービス・ラーニングは、大学や高校・中学など学校教育で行われるボランティア活動を、それぞれの教育目的と連関させたプログラムとして行われることが多い。しかし、その定義は厳密な意味で確立していない。内容も多様であり、論者によってさまざまな考え方がある。ならば、教育者養成大学である本学ならではのサービス・ラーニングの可能性を追求してみよう—それが大学史資料室における実践のゼロキロポストであった。

2. 大学の歴史を視覚化する—博物館実務実習での実践から

(1) 連携の経緯と 2020 年度の実務実習内容

本章では、2021・2022 年度本学大学史資料室と生涯学習教室との連携で行われた博物館実務実習（科目名「博物館実習Ⅱ」）における教育実践について紹介する。内容的には大学史資料室に対する実習生による貢献的活動を基軸とするものであり、担当教員としての筆者が学部教育連携を通じたサービス・ラーニングの可能性を意図する形で進められた。

大学史資料室における博物館実務実習が、授業連携の形で初めて行われたのは 2020 年度のことである。³ COVID-19 パンデミックは地球規模でさまざまな社会変革を起こしつつあるが、文化庁の通知をもとに本学でもコロナ禍における博物館実習というこれまで体験したことのない課題に取り組んだ。

特に、学芸員資格取得のための法令科目である博物館実習については、COVID-19 の国内感染状況が悪化していくなかで、各地の博物館が実務実習の中止や期間短縮、受入れ人数の縮減、遠隔形式での実施などの動きを見せるようになり、やむを得ない事情とはいえ、各大学とも大きな苦労を強いられることになった。博物館側には実習生を受け入れる法的義務は一切なく、あくまでも博物館側が社会教育施設としての責務として、また教育普及活動の一環として好意で受け入れているのが現実である。感染防止対策の徹底という観点で言えば、それらの動きも十分理解できる。

東京都内および周辺部の感染状況がますます厳しさを増した 2020 年 5 月、都内や周辺部に位置する博物館を希望していた学生 5 名が、いきなり実習館を失うという困難に見舞われた。そのため、学生の希望や意思を確認したうえで、大学史資料室に支援を要請することになったのである。前述したように、その際、担当教員としての筆者自身の念頭にサービス・ラーニングの意図があり、大学史資料室側との検討を経て、実習内容の具体案を小金井キャンパス大学史ツアー映像の制作（シナリオ・映像制作、自作のシナリオ作成とそれに基づいたツアーガイド、ナレーション入れ等を実習として実施）、Web 企画展スライドでのキャプション制作とナレーション入れに定めた。博物館実習を通して小金井キャンパスをフィールドミュージアムに見立て、大学を視覚化するための映像資料を学生とともに作り、公開を目指した。

実施に当たっては、大学史資料室員である学部教員、椿真智子先生（人文地理学）、服部哲則先生（文化財化学）、日高智彦先生（社会科教育学）と専門研究員である牛木純江先生（日本近代史）に協力いただき、学生と協働するスタイルで実習を行った。完成した映像作品は大学史資料室の「web 企画展」と連動させ一般公開された。

前稿でも指摘したように、この実習内容では資料整理や保存管理、展示などの基本的な学芸業務に関わることはできない。しかし、実習ではフィールドワークを通して自校史学習を積み重ね、大学の歴史を学外に向けて視覚化するという課題のもとに映像が制作・公開された。これは、学生たちにとって重要な経験となったに違いない。同時に、映像作品を公開した大学史資料室としても、この実習は資料室そのものの存在価値を高める上でのメリットとなったと思われる。

(2) 2021年度の実務実習内容

2021年度も博物館実務実習はコロナ禍の影響を受けた。学生が実習館探しで苦戦する中、結果的に実習館を失うこととなった学生1名（教育支援専攻生涯学習コース所属）が大学史資料室で博物館実務実習を行うことになった。⁴ 学生の意思と問題意識を確認した上で、大学史資料室で実習を行う目的や内容を十分に理解できていると判断し、実習館として選択させることとなった。以下、学生本人が実習後に作成したレポートを中心に実習内容を紹介していくこととするが、記述の引用等にあたっては学生本人の承諾を得ていることを申し述べておく。

学生は、話し合いの中で大学史資料室の「保存・展示等の活動」にどのような工夫がなされているのか研究することが実習の主目的であると述べていた。その問題関心を大切にしつつ、担当教員としてより発展的な課題を持てるよう学生との間で検討を進めた。大学史資料室との事前検討の中で、学生の希望も活かし、公開を前提にした展示導入映像（プロジェクションマッピング映像）を制作することを提案し、それを今年度実習の課題に設定することになった。

この学生は実習開始の時点でデジタル映像制作企業から就職内定を得ており、既にかかなりのレベルの制作技術を有している状態であった。今回の課題設定に踏み切ったのは、博物館展示への問題関心とその特性を活かす形で、大学史資料室でのサービス・ラーニングに繋げていけるのではないかという可能性を感じたからである。

実習を進めるにあたって大切にすることは、学生本人の問題関心を尊重すること、大学史資料室の牛木専門研究員、事務を担当する瀬川係長、担当教員である筆者との十分なコミュニケーションをとること、そしてサービス・ラーニングの考え方を活かすことであった。実習の成果を実践で活かすことになるため学生の意欲も高まり、資料室にとっても大きなプラスになる。そのため丁寧な相互検討を経て次のステップに進むという形を大切にした。その際、大学史資料室サイドが「学生の活動を支援し、学生と共に資料室を作っていく」というコンセプトをしっかり持っていたことが重要なポイントとなった。事実、学生も資料室職員から伝えられたこの姿勢に強く惹かれたと述べているが、このことにより学生本人の積極性がさらに引き出された。大学アーカイブズは研究者や大学教員、専門職だけのものではない。「学生と共に」という大学史資料室の姿勢が、学生の主体性を引き出している。双方がウィン・ウィンになる関係性を築くという点で、資料室が示したこの問題意識と姿勢は教育的な観点から見て高く評価されてよい。実習は以下の日程・内容で進められた。以下、学生による実習レポートを筆者が一部補筆、まとめる形で引用、紹介する。

○10月14日

指導教員とともに資料室との打ち合わせを行い、展示内容などについてお話を聞かせていただいた。係長さんが「資料室は学生と一緒に作っていききたい」とおっしゃっており、その言葉通り、実習では展示室に興味を持ってもらうための映像制作を行わせていただくことになった。私自身が大学史のことを研究したうえで、資料と学生をつなげる映像を制作することを課題として設定した。

【表1】実習日程と主な内容

| |
|-----------------------|
| 10月14日(木) |
| ・第1回 大学史資料室打ち合わせ |
| ・実習のご挨拶 |
| ・室内の見学 |
| ・保存資料の閲覧 |
| ・作成映像の確認 |
| 10月18日(月) |
| ・東京学芸大学沿革表の作成 |
| ・沿革表の考察 |
| ・東京学芸大学歴史の文献研究 |
| ・資料画像の選定 |
| 10月20日(水) |
| ・プロジェクションマッピング映像の先行研究 |
| ・映像の構成検討 |
| ・絵コンテ制作 |
| 10月22日(金) |
| ・プロジェクションマッピング映像の構成検討 |
| ・解説画像の構成検討 |
| ・絵コンテ制作 |
| ・必要資料のリスト化 |
| 10月27日(水) |
| ・映像展示先の検討 |
| ・資料提示の下準備 |
| ・プロジェクションマッピング仮映像の作成 |
| 11月2日(火) |
| ・第2回大学史資料室打ち合わせ |
| ・使用資料の確認 |
| ・資料の著作権について研究 |
| ・資料の研究 |

○10月18日

映像を作成するにあたって、東京学芸大学の歴史を学んだ。学びの中でキャンパスが幾度となく変化していることを知った。社会の影響を大きく受け、大学が求められる役割やあり方に関しても変化があった。100年を超える歴史の中で多くの人が本学に関わり、社会の中で重要な役割を果たしてきたことを知るきっかけとなった。しかし、私を含めた本学の学生でさえこの歴史を知るものは少ない。そのため、この資料室の存在が大学を知る上でとても重要な存在であり、そうになっていく必要があると感じた。

○10月20日

この日は、博物館に導入されているプロジェクションマッピング映像の事例などを研究した。さまざまな作品を参考にしつつ、どのような映像を資料室に展示すればよいか、学芸大のイメージを強く与える、没入感のある映像にできるかを研究した。

○10月22日

プロジェクションマッピング映像のコンセプトを検討した。大学史資料室を「学芸大を表現する空間として魅せる」とし、訪れた利用者が「学芸大を感じる」ことができるような映像にすることを目的に設定した。そのため、キャンパスの魅力になっているケヤキ広場を背景として設定し、そこに集う多世代の人を表現することにした。

○10月27日

検討会での指摘で、解説映像に関してはただわかりやすく物事を説明すればよいというわけではないことを学んだ。今回制作する解説映像では「学芸大の歴史を知る」→「もっと知りたいと思う」→「資料室内に誘導し、資料を通して当時の様子を見てもらう」という流れを作る必要があるということになった。そのため、資料そのものを出すというよりも、アニメーションを効果的に使用し、全体の概要が理解しやすいように工夫を行うことになった。

○11月2日

実際に制作した試行版の映像を見ていただき講評を得

11月4日(木)

- ・師範学校の資料画像の確認
- ・資料の出典の研究
- ・ケヤキ広場の撮影

11月5日(金)

- ・資料のトリミング
- ・人のシルエット画像作成

11月8日(月)

- ・資料のはめ込み
- ・必要資料の調整
- ・プロジェクションマッピング映像の配置作成

11月11日(木)

- ・解説映像のアニメーション制作
- ・プロジェクションマッピング映像の配置作成②

11月17日(水)

- ・まとめ作成
- ・解説映像のアニメーション作成②
- ・解説文言の文字おこし
- ・プロジェクションマッピングアニメーション作成

11月19日(金)

- ・第3回大学史資料室打ち合わせ
- ・作成映像の評価
- ・今後の課題について見つめなおし
- ・実習のまとめ

る。優れた点や改善点について話を伺ったり、実際に使用させていただく資料について具体的な検討を行ったりした。使用する資料のほとんどがデジタルデータ化されており、さまざまな場面で、すぐに利用できるようになっていた。

資料のデジタルデータ化は、博物館やアーカイブズにとって必要不可欠な作業であることを実感した。また、検討会の中で資料の取り扱いに関しては、気をつけなければいけない点があることに気がつかされた。肖像権や版權などさまざまな権利に関するものであるが、この点については、今後も学んでいく必要があると感じた。

○11月4日

使用する写真資料や出典に関して調査研究を行った。『東京府女子師範学校 第26回卒業記念』(1928年3月)掲載の写真資料を使用するが、卒業アルバムの写真も、将来的に見れば学校教育の貴重な文化財になることを実感した。入学式の写真に映っている人の服装などからも様々な情報を読み取ることができる。大学が持つ歴史資料一つで、当時の社会の様子を推測できるということに興味を抱いた。

○11月5日

この日は映像に使う資料の編集を行った。事実を間違えて伝えてしまったり、制作者の価値観を余計にねじ込んでしまったりしないように、ありのままのものを、そのまま使うことを重視して作業することの大切さを学んだ。

○11月8日

映像制作を進めるにあたりいくつかの課題が出てきた。1画面に出せる情報は限られている。あまり情報量が多いと、結局、何の説明をしているのかが分かりにくくなり見る人の頭を混乱させてしまう。そのため、画面を適切に動かすことで、見る人の視点を誘導する必要があると感じた。

○11月11日

これまで作成してきた資料や絵コンテをもとに、全体を動かしアニメーションの作成を行う。実際に動かしてみると早すぎたり、遅すぎたりとまた新しい課題が見つかった。特に制作者である私自身は映像の内容を分かっ

ているため理解に時間を要しない。しかし、初めて見る人とは差が生じるに違いない。常に、見る人の視点に立ち映像やアニメーションを制作することが重要であることを学んだ。

【図1】学芸大沿革の映像化と改良例（左改良前、右改良後）



改良前は平面図を用いて全体の流れを表現し、色違いのラインを用いて校舎・名称等の変遷を解説していた。しかし、それぞれの色がどの校舎を表現しているのかが分かりにくく、校舎の沿革と時代の流れの関係うまく表現できていない等の指摘を検討会で受け、課題が生じたため改良を行った。

改良後の映像では、アイコンを立体的にし、マップを用いることで全体の変遷を時代の流れに結び付けて考えることができるように工夫した。また改良前に用いていた色違いのラインも分かりにくいという指摘を受け、校舎のアニメーションや矢印に変更することで、明確に違いを表現できるようにした。

【図2】マップの改良例（左改良前、右改良後）



改良前の映像ではバランスのみ考えて各地域エリアを配置していたが、検討会での指摘を受けて、史実に忠実に図化することを一番に考え、資料を調査し各地域の名称や配置などを変更した。また校舎のアイコンも、時代のイメージをつかめるよう鉄骨から木造へ変更するなどの工夫を施した。

○11月17日

解説文の作成を行う。11月11日に作成したアニメーションをもとに解説文を考える。映像と同じく、これもまた見る人の視点に立つことが重要であるため、資料室の瀬川係長さん、牛木先生のアドバイスを得ながら改善を繰り返した。

○11月19日

実習のまとめとして、指導教員と資料室の方々に映像を見てもらい指摘を頂く。今回の実習で映像制作を行いながら、大学史資料室の重要性や資料自体の在り方を学ぶことができた。映像自体にはまだ改善の余地があり、今後実際に展示活用するにあたって、これからも資料室と一緒に改善していきたい。

3. サービス・ラーニングの可能性と大学史資料室の教育的意義

コロナ禍の影響を受け、昨年に引き続き大学史資料室で実施された博物館実務実習であるが、完成した展示導入映像（プロジェクションマッピング映像）は、学生から資料室に寄贈され、取り組み自体がサービス・ラーニング的な要素を持つことになった。無論、ここ2年の取り組みは、大学アーカイブズや博物館で行われる従来型の実務実習とは内容的にも性質的にも大きく異なる。

アーカイブズの視点で言えば、学芸員やアーキビスト養成という目的のもと、従来から行われている記録資料の整理・保存を中心とする実技・講座型実習の意義は変わらない。また、博物館実習の視点で言えば、課題を映像展示制作に絞り込んだことで、本来取り扱うべき内容がドロップしたことは否定できない。しかし、学生の専門性や特性、問題意識を踏まえて映像展示制作という課題に絞り込み、それに実際の活用というサービス・ラーニング的な要素をプラスアルファしたことで、あらかじめ用意されたプログラムを受け身でこなすようなスタイルにはならなかった。学生の主体的かつ自覚的な姿勢を引き出すことができた点での教育的意義は小さいものではなかった。また、学生が最後までこだわっていた「展示環境の創り手としての目線」「展示を見る人の立場に立つこと」をサービス・ラーニングとしての映像制作を通して深く考えさせる機会となった点は、展示表現や博物館教育論の点から見ても意義があった。

今回は実際に活用される映像の制作という課題を通して、問題意識をチームとして共有できたと思われる。学生と共に映像展示を作る作業を通して大学史資料室スタッフにも教育機能への意識がこれまで以上に高まり、他方、学生にとっては大学史資料室を自らと深く関わるものとして意識してもらうことができた。それは、「東京学芸大学史資料室は大学にとって必要不可欠な存在であり、今後歴史を重ねていくにあたってその役割を増していくのだと感じた」というレポートに書かれた学生の言葉に象徴されている。

今回、大学史資料室で博物館実務実習に取り組んだ学生は、教員を目指す学校教育系所属の学生ではなく、チーム学校や地域教育等を支える教育支援職養成を目的とする教育支援系に所属していた。なかでも博物館学を専攻し、博物館で使用する展示映像、映像展示などについて技術面も含めた研究を進めていた学生であり、今回の実務実習での成果は卒業研究にも活かされた。歴史学や教育史を専門にする学生ではなく、大学史や大学史資料について基礎的なことを学んでもらうことも多かった。しかし、今回の取り組みを通して、教育支援系の学生が、前身である師範学校や教員養成大学としての本学の歴史を学ぶことで、大学のアイデンティティを知り、自らの立ち位置を確認すること、映像展示を制作することで資料研究を踏まえた歴史像再構築の重要性やそれを

イメージとして表現することの難しさなどを学んでもらえたことは収穫であった。

昨年に引き続き、今回も大学史資料室におけるサービス・ラーニング的な学びを目指す博物館実務実習を試みた。「学生の活動を支援し、学生と共に資料室を作っていく」というコンセプトを貫き、2年連続で学生を受け入れてくださった大学史資料室のスタッフには感謝の言葉しかない。今後、大学アーカイブズとしての基幹機能を大切にしつつ、教育DXなどの課題にも取り組みながら教育者養成大学ならではの授業連携を継続発展させていくことが大切である。そのことを軸に大学史資料室の教育的役割や価値を創造し続けていくことで、そのプレゼンスはより高まるに違いない。可能性は拡がりつつある。

注

- 1 近年の先行研究では、倉方慶明「大学アーカイブズと「自校史教育」—大学文書館における普及活動とその役割—」『アーカイブズ学研究』23号所収、日本アーカイブズ学会、2015年があり、本稿の問題意識に重なる部分がある。その他、国立大学アーカイブズの「自校史教育」については、山口拓史「国立大学における自校史教育の意義—名古屋大学を事例として—」、『名古屋大学史紀要』第11号、名古屋大学史資料室、2003年、折田悦郎「大学文書館の設置と『自校史』教育」、『神戸大学史紀要』第7号、2007年などの先行研究がある。それぞれ各大学における実践事例を通しての意義が論じられている。
- 2 筆者が外部評価委員として関わった2021年度の京都大学文書館外部評価においても、大学アーカイブズの教育活動について、学内貢献という枠組みを超えた、地域連携、地域教育の視点の重要性について指摘がなされた。国内、世界のアーカイブズ界との提携とともに、アーカイブズ教育を軸にした地域社会への地に足をつけた貢献、地域教育の視点が提起された。（『京都大学文書館外部評価報告書』、京都大学文書館、2021年）。
- 3 詳細については、拙稿「COVID-19パンデミックにおける大学アーカイブズによる博物館実習への支援—東京学芸大学大学史資料室での事例を中心に—」、『大学史資料室報』vol.8所収、東京学芸大学大学史資料室、2021年を参照されたい。
- 4 実習を行ったのは、本学教育支援課程（E類）教育支援専攻・生涯学習コース生涯学習サブコース4年（博物館学分野）の大島空さんである。本稿では本人の承諾を得て、提出された博物館実習レポート（大島空「東京学芸大学大学史資料室」〔『東京学芸大学博物館報告』2022年3月〕の一部を引用し、追加で提供された図も転載した。記して謝意を表したい。

大学史資料室関連収蔵施設の環境調査を振り返って

服部哲則（自然科学系講師）

今年度で退職するにあたり、これまで行ってきた大学史資料室関連の収蔵施設における環境調査について、振り返ってみたい。

一連の環境調査は、2012年4月の大学史資料室開設時から始まっている。

まず、大学史資料室事務室の隣に設けられた収蔵室の、温湿度、虫害虫、浮遊菌の調査を開始した。現在、この部屋は拡張され一時保管室と名称が変わったが、継続的に調査が続けられている。

その後、学務課の倉庫、改装前の附属図書館旧AVホール、教職大学院棟演習室の環境調査を経て、現在、図書館地下の大学史資料室収蔵庫および新装なった大学史資料室展示室の環境調査を継続的に行っている。

そもそも、考古資料の保存修復が専門の私が、書籍収蔵の環境調査を行うようになったきっかけは、2002年度卒業の学生が選んだ卒論テーマである。改装前の人文社会2号館1階廊下に保管されていた中国古典の古書籍が、虫害を受けているので調査したいというものであった。⁽¹⁾ 続いては、2006年度卒業の学生が、大学附属図書館所蔵の貴重図書「望月文庫」の保管環境調査を行いたいというものであった。こちらは、図書館側担当者と相談し、データロガー、虫害虫トラップ、定期的な浮遊菌調査を行うことになり、その後複数年続けたのち報告書にまとめた。⁽²⁾ これら環境調査の一部は、現在附属図書館独自の調査作業となっている。このようなことを行っていることが、大学史資料室開設の準備をされていた先生方の耳に入り、同室における環境調査担当とのお声がかかったものと理解している。

話を大学史資料室に戻すと、大学史資料室開設直前の2012年3月の大雨で、隙間から吹き込んだ雨水により濡れてしまった学務課関連書類倉庫内の資料の一部が、有志らによって合同棟の大学史資料室収蔵室に緊急避難されることになった。これらの資料は、同年10月に外注で燻蒸処理され、現在は図書館地下の大学史資料室収蔵庫に保管されている。

学務課関連書類倉庫は、正門近くの駐車場に接して建てられたプレハブ倉庫内にある。壁面に波板状の屋根が載っているだけの構造なので、隙間から外気だけでなく、雨水、粉塵、虫害虫などの侵入が容易である。2013年6月から2014年7月までの1年余り、温湿度と虫害虫の環境調査を実施している。温度は、ほぼ外気温と同様に推移し、相対湿度は6月から10月の間では、80% Rh 越えの日が頻繁に続き、11月から5月の間でも60% Rh 以上の日が多いという劣悪な環境であった。一方、調査期間中虫害虫の捕獲は、シバンムシとゴキブリが各1匹ずつという意外に少ない状況であった。

20周年記念誌及び50周年記念誌作成時に用いた資料は、改装前の附属図書館3階にあったAVホールの西側壁際に置かれた保管庫とホール付設の備品倉庫に、1993年以降保管されており、2013年7月から2014年4月まで環境調査を行った。

保管庫の環境は比較的良好で、庫内の温度は夏季に30℃を超えることがあったが、相対湿度はおおむね40～50% Rh 台に収まっていた。一方、付設の備品倉庫は温度が保管庫と同様な挙動を示したが、相対湿度は高く、夏場よりむしろ気温の下がる10月から2月ごろまで60% Rh を超える日が多くなっていた。写真アルバムなどの資料もあり、決して良好な環境にあったとは言えない。

これらの資料は、附属図書館改装工事に伴い2014年5月から、東門近くに新築された教職大学院棟の演習室に移され、工事が終了し地階に大学史資料室収蔵庫が完成する2015年4月まで一時保管された。

この間の保管環境は決して良好なものではなく、温度は夏場 30℃を超え、冬場 0℃近くまで下がった。また、相対湿度は年間を通して高く、1年を通して 80% Rh に届く日が断続的にあったとともに、日毎の値の変化が大きかった。さらに、太陽光の入射が疑われる照度の測定値もあった。仮保管といえども、事前の環境調査が必要と思われる。

ここまでの環境調査については、別途大学紀要で報告しているので、参照されたい。⁽³⁾

現在、合同棟収蔵室に保管されていた学務課書類資料、および、前述の 20 周年、50 周年記念誌資料は統合されて「東京学芸大学五十年史資料」として、また、その後移管された「撫子会保存資料」、「東京第一師範同窓会保存資料」などが、燻蒸処理を受けたのち改装後の附属図書館地下に新設された大学史資料室収蔵庫に保管されている。

一方合同棟 2 階の一時保管室には、「附属小金井中学校関連資料」、「附属小金井小学校関連資料」、「附属幼稚園関連資料」などの学校関連資料の他、学内部署、個人、各所から 2016 年以降寄贈された資料が保管されている。

現在行っている環境調査方法は以下のとおりである。

温湿度照度調査：

附属図書館大学史資料室収蔵庫、合同棟一時保管室では、データロガー（T&D 社製 RTR-574）を、天井に近い個所と床面それぞれ 1 台ずつ置き、1 か月ごとの温度、湿度、照度を記録している。

新大学史資料室展示室では、データロガーを、平置き展示ケース 2 か所（T&D 社製 RTR-574）及び縦型保管庫内 1 か所（T&D 社製 TR-74Ui）に置き、1 か月ごとの温度、湿度を記録している。

虫害虫調査：

附属図書館大学史資料室収蔵庫、合同棟一時保管室では、庫内中央に下記のフェロモントラップなどを仕掛け、約 1 か月毎の虫害虫の生息状況を確認している。

- ・ジンサンシバンムシ パニシウム® 富士フレーバー
- ・タバコシバンムシ ニューセリコ® 富士フレーバー
- ・ヒメマルカツオブシムシ ニューセリコ® 富士フレーバー
- ・ゴキブリ ごきぶりホイホイ® アース製薬

浮遊菌調査：

各収蔵施設で大きな移動があった時など不定期に、微生物センサ（エア・ウォーター バイオデザイン社製 BM-300C）を用いて、ほぼ 1 か月に渡り、毎日 1 時間ずつ室内、庫内の空気を吸引して調査している。

空気汚染調査：

新築時資料搬入前、また資料収蔵中の収蔵庫内空気内汚染状況について、アンモニア、ホルムアルデヒドを、それぞれの検知管（ガステック社製）により測定している。

これまで、調査項目を増やしながらか環境調査を行ってきたが、担い手不足のなか、浮遊菌や空気汚染調査については、卒論、修論の一環として学生たちに手伝ってもらってきたところもあり、定期的な調査に至っていない。特に浮遊菌調査では、以前行っていた培地を用いた調査方法とのデータの擦り合わせを私の怠慢により行っておらず、新旧のデータ比較ができないままとなっている。また、温湿度照度測定を行っているデータロガーは、LAN に繋ぐことで、複数の収蔵施設のデータを一括して遠隔で管理できる機能を備えているにもかかわらず

ず、大学の LAN 回線が事務系と研究系に分かれていることで、構築できないままになってしまった。

大変恐縮ではあるが、後任の担当者にはこれらを受け継ぎ、完成させることで、大学史資料室収蔵資料のより良い保管環境の構築に尽力いただければ幸いである。

参考文献

- (1) 服部哲則・吉川也志保 (2003), 「東京学芸大学所蔵古書籍の虫害状況と保管法に関する研究」. 東京学芸大学紀要 第4部門 数学, 自然科学 第55集, pp.213-224.
- (2) 服部哲則・高木睦美・金平夕香 (2009), 「東京学芸大学附属図書館所蔵「望月文庫」の保管環境に関する調査研究」. 東京学芸大学紀要 自然科学系 第61集, pp.145-162.
- (3) 服部哲則 (2015), 「東京学芸大学大学史資料室関連収蔵施設の保管環境に関する調査研究」. 東京学芸大学紀要 自然科学系 第67集, pp.177-187.

創成期の東京学芸大学における学生生活—卒業生の語りをもとに

金子真理子（次世代教育研究センター教授）

1. 問題設定

本稿は、創成期の東京学芸大学のカリキュラムと学生生活を、当時の人々の主観に即して記述する研究プロジェクト（金子編 2011, 金子 2021, 金子・早坂 2020）の一環である。明らかにしたいのは、「大学における教員養成」を構築しようと働いた人びとの営みであり、教員養成に携わる者たちが永く記憶に留めるべき原点である。先に金子（2021）は、大学側の取り組みとして、『東京学芸大学カリキュラム』（東京学芸大学 1952）の記述をもとに、教員養成の理念やカリキュラムが「模索」された痕跡を見いだした。これに対し本稿が取り上げるのは、創成期の東京学芸大学の卒業生の1人、鈴木禹志（すずきひろし）さんへのインタビュー調査をもとに、学生がカリキュラムやキャンパスを超えて、ともに学び、考え、活動していた姿、すなわち学生側の営みである。

東京学芸大学は、複数の師範学校を包括して、教員養成を目的とする国立の教員養成大学として創立した歴史を持つ。陣内靖彦は『東京学芸大学五十年史』において、東京学芸大学が戦後、新制大学として発足してからの50年を、以下の四期に区分している（陣内 1999, p.7）。

- I 1949（昭和 24）年～1963（昭和 38）年までの「整備・統合期」
- II 1964（昭和 39）年～1975（昭和 50）年までの「拡充・発展期」
- III 1976（昭和 51）年～1986（昭和 61）年までの「展開期」
- IV 1987（昭和 62）年～1999（平成 11）年までの「転換期」

本稿が「創成期」と呼ぶ時期は、その第 I 期にあたる。すなわち、1949 年 5 月 31 日法律第 150 号国立学校設置法により、それまでの東京第一師範学校、東京第二師範学校、東京第三師範学校、東京青年師範学校を包括し、東京学芸大学が設置されて以降、旧師範学校の所在地が分校として併存した状態を終え、現在の小金井地区に統合された 1964 年 4 月 1 日までの 15 年間である。陣内によれば、「戦後教育史の区分でいえば「模索期」を経て「量的拡大期」もすでに半ばを過ぎた六〇年代の前半まで、本学は「タコの足大学」と呼ばれ、そこには旧師範の寄り合い所帯の様相が色濃く残存していた」（陣内 1999, p.8）という。

鈴木禹志さんへのインタビューは、2020 年 1 月 14 日の昼下がり、東京学芸大学の教員養成カリキュラム開発研究センター会議室（当時）で、筆者を含む当時の大学史資料室員 5 名が鈴木さんを囲み、3 時間にわたって行われた。インタビューは IC レコーダーに録音され、その概略は木暮（2020）に的確にまとめられている。鈴木さんは、インタビューに際し、自身の経歴や大学入学後の出来事等について資料にまとめてきてくださり、我々に配布した上で、大学入学から卒業までの出来事を時系列に沿って、とりわけ印象深いエピソードを交えてユーモアたっぷりに語ってくれた。筆者は、その後、2021 年 11 月 19 日に東京学芸大学の大学史資料室で鈴木禹志さんと再会し、最初のインタビューから気になっていたが理解が及んでいなかった部分の話を再び伺い、さらに 2022 年 2 月にメールで頻繁にやりとりをした。筆者の質問に対し、鈴木さんは丁寧に回答をくださっただけでなく、文献や関連資料まで送ってくれた。

本稿では、2020 年 1 月 14 日のインタビューでの語りを中心にして、先行研究や当時大学が行った学生調査の結果等を参照して文脈を補いながら、創成期の東京学芸大学における学生生活を素描する。鈴木さんの証言

は、当時の教育系大学を取り巻く社会的文脈と関連し、大学教員の姿も垣間見られるような貴重なものであり、さらなる分析は別稿を期す。

2. 貧困からの出発

鈴木禹志さんは、1955（昭和30）年から1959（昭和34）年にかけて、甲類すなわち小学校教員養成課程の社会科学専攻の学生として、1、2年次は小金井分校、3、4年次は世田谷分校に在籍していた。当時の小金井キャンパスは、兵舎を改造した木造校舎での授業と、不十分な図書や食料事情で知られている（東京学芸大学史資料室2018, p.26）。鈴木さんがインタビューの際に用意してくださった資料「分校時代（1955年～59年）のひとりの学生が見たこと 貧しかったけれど…されどわが青春」の冒頭は、「小金井分校の劣悪な勉学環境に絶望。」という文字で始まる。小金井分校の環境は、鈴木さんが最初に入学手続きに行った世田谷分校とは雲泥の差で、「文化果つるところ」という印象を受けたという。とくに「図書室」の貧弱なことに愕然としたそうだ。

「夏の草の生え方もすごいわけですよ。先生が向こうから入ってくるんだけど、こう草を分けて。「どこから来たんですか」って（笑）。僕らも先生が来るまで、教室の中なんか狭くて暗いし汚いし、教室になんかいられないので外で遊んでいましたけどね。」

「図書室のぼろさというのは、世田谷でいちおう図書館らしいのに出会ったので3年のときはよかったんですけど。でも小金井にずっといた人は、体育科とか数学科とか美術科の人はずっとこの図書室に行ったんじゃないかなと思うんだけど。」

そして鈴木さんは、仲間と写った写真を見せながら、当時の学生が置かれていた苦しい経済状況についても語っている。

「僕の友だちなんかも何人かいるんですけど、一応高校卒業してから代用教員か何かをやって、それでお金を貯めて入ってきたというのが結構何人もいましたよね。（中略）いずれにせよ、うちから潤沢にお金を送ってくれないのは全員共通していました。4月に入ったときは学帽かぶって学生服を着ていましたが、わずか1カ月ぐらいうちに街のおにいさんみたいになっちゃって、下駄履いて歩いているし。持っているものは全部、質に入っちゃったとみんな言っていましたから。多摩川の近くにあるポートルース場にアルバイトに行ったりなんかしなきゃいけないというので。」

当時の東京学芸大学生の経済状況の厳しさは、1956、1957（昭和31、32）年度に大学が新入学生（1956年：880名、1957年880名）に対して実施した「新入学学生に関する調査」（東京学芸大学1956、1957）、および1958-59（昭和33-34）年にかけて東京学芸大学教務補導部が1～4年生（抽出率15%：小金井分校329名、世田谷分校166名）に実施した「学生生活実態調査」（東京学芸大学教務補導部1959a、1959b）からも見いだせる。金子・早坂（2020）は、これらの調査から見える「創成期の東京学芸大学生の家庭の収入とアルバイトの必要度」を、文部省（当時）による全国調査の結果と比較検討している。これによると、高等教育進学機

会がエリート段階であった時代に進学できたという点で、創成期の東京学芸大学の学生は教育機会の面では恵まれていたといえるものの、大学生一般と比較すると経済的には恵まれない階層の者たちであったことが一目瞭然であった（金子・早坂 2020）。鈴木さんへのインタビュー時にも、筆者がそのデータを見せると、鈴木さんはうなずき、「たしかに実感としてわかります。本当にわかります。1カ月前は学帽をかぶっていたのが、少ししたら全く学帽がどこかへ行っちゃって。洋服もどこかへ行っちゃって。」と繰り返した。鈴木さん自身、東京の実家から通う自宅生であったものの、経済的には厳しく、上野駅のアイスクリーム売りや、三鷹の横河電機の工場などでアルバイトをしながら学ぶ学生であった。

3. 大学での学び

それぞれ苦勞して入学してきたであろう創成期の学生たちが、上述のような大学環境を前にして満足していたわけではもちろんない。前述の「学生生活実態調査」（東京学芸大学教務補導部 1959a, 1959b）によると、当時の学生たちは、「厚生施設・学校施設」については4割弱が「大変悪い」、4割強が「まだ充分でない」と回答し、「図書館」については2割強が「大変悪い」、6割弱が「まだ充分でない」と回答しており、鈴木さんの感覚に符号する。同調査では、カリキュラムに関しても9割近い学生が「改めてほしい」（「まったく改めてほしい」23.9%＋「一部改めてほしい」64.7%）と回答していた。また、カリキュラムに対する学生の要望としては、「自由選択をひろげる」「専門教科を強化せよ」といった声が多かったことが、自由記述欄からわかっている。（金子・早坂 515-517）

このような状況のなか、学生たちはどのように学んでいたのだろうか。鈴木さんは、大学1年生の頃の日記を手語してくれた。

「本当に文化的な香りがないわけですよ。音楽の香りもないし。それどころかここに、何かよくわからないんですけど、東門の前あたりにブタとかニワトリを飼っていたんでしょうかね。すごいにおいがするんですよ。（中略）とにかく文化果つところはここしかない。どうするかということですよ、ここに来ちゃったら。どうするかということで、2年からほかの大学に行った人が結構いるんですよ。（中略）東京外国語大学に入ったやつもいるし、日大の理工学部にも社会科から入ったやつもいるし。だけど僕は遊んでいたものですから（友だちづきあいやサークル活動をしていたという意味—筆者注）、あれよあれよという間にあれなので。」

鈴木さんは、「文化の香り」を求めて入学されたであろう大学の環境に、さぞかしがっかりされたに違いない。しかし、打ちのめされていただけではなかった。「どうするかということですよ」という意識が、大学を去った者だけでなく、残った者のなかにもあった。その後、鈴木さんはどうしたのか。

「勉強をあまりしなかったもので、在学中にどんな勉強したかと聞かれると困るんですけど。ただ、非常に何というか野次馬根性が最初からあって、とにかくカリキュラムとか、決まっているあれというんじゃなくて、いい先生がいるという聞きにいったし、それから、いい学生が来たという会にいましたよ。国語科に宮越さんというのが入ってきてね。宮越というのはいいぞと言ったから、僕、そのときしか会ったこ

とないんだけど会って話してなかなかいいやつだと思ったんですけど。でも、宮越先生が木下学長のスピーチ（の趣旨）をいろんなところで書いてくださっているの、やっぱりありがたいなと思っているんです。宮越賢さんという国語科だったんだけど、いいやつが入ったって、ちらっと聞いたので。（中略）

それからおもしろい授業だというのを聞いたら、特に英語の先生の授業はかなり聴きましたね。だけど、何というか時間もむちゃくちゃだし、とにかく申し上げたかったのは、ぼろっかったけど、この日記に書いてあることは（小金井ではじめて出会った）友だちとね、三鷹の駅前に「第九」という喫茶店があったんですけど、音楽喫茶で。（中略）いろんな方が、三鷹は何がいいかという喫茶店と本屋があってゆっくりできるから、とって。（中略）東大の寮が三鷹にあったらしくて。東大の方とか、それから武蔵野美大とか、音楽関係とか。とにかくしゃべることは禁止なんですよ。ただリクエスト出すと、そのリクエストがかかるまで半日とかかかっちゃうので、入ったら出てくるのが大変で。だけどそこに入り浸って、貧しい家だったものだから自分のうちにレコードはないし、あれもないからそこで聞いて。終わってから、日比谷の安いコンサートをよく聞きにいきました。日比谷の野外コンサート。（入場料の）安いコンサートがあった。お金持ちの方は上野とか立派なところでコンサートを聞くんですけど。でもいろんな曲を生で聞いて、今になってみればよかったなと思うんですけどね。」

鈴木さんはそれほど真面目な学生ではなかったというが、学内で、いい先生がいるという聞きに行き、いい学生が来たという会いに行った。学外でも、三鷹の駅前の「第九」で音楽を聴き、日比谷の「野音」に通った。いろんな音楽を聞いた思い出を「今になってみればよかったな」と振り返る。

学生たちは、創成期の東京学芸大学の設備やカリキュラムに満足していなかった。しかしながら、「文化の香り」に憧れた学生がその機会を大学内外に自ら探しに行けるような、時間と自由は少なくとも保障されていたといえるのではないだろうか。

4. 全教学協と全教ゼミ

鈴木さんによると、当時の授業料は年間6,000円だったが、「(大学が)年間6,000円を9,000円にすると言ったら、授業料闘争というえらい闘争が発生しまして。3,000円値上げするというのはとんでもないというので。」と語っている。当時、鈴木さんは、学生新聞会の記者として、「自治会とか全教学協の活動を取材する立場」だったため、学生側の動きにも詳しくあったのである。

「僕はどちらかといいますと、学生新聞だったものですから自治会とか全教学協というのがありますが、全学連とか。全学連の香山さんの演説なんか何回も聴きましたけど。大学は、とにかく全教学協とか全学連というのは全く賛同しないんですよ。（中略）僕はノンポリですけど、学生の活動は取材しましたが、全教学協なんて、いいあれじゃないかなと思うんですけど。」

「全教学協」（全日本教育系大学学生協議会）は、鈴木さんの入学の3年あまり前の1952年1月に結成されている。これは、「これまでの官製的色彩のつよい全国師範学校生徒連盟、全国青年師範学校生徒連盟とは性格、内容、目的など質的に異なった、教育系学生の自主的な全国的統一組織」として結成され、全教学協規約前文に

はその目的が「我々の全日本教育系大学学生協議会は、全日本の平和的発展と限りなき幸福を追求し、教育を一そうすばらしくするための力として結成された。」と記されていた（伊ヶ崎・山崎・土屋 1969a：98-99）。『東京学芸大学二十年史』によると、この結成大会は、東京学芸大学世田谷分校にて、大学当局の再三の中止勧告を押し切り開催されている（東京学芸大学二十年史編集委員会 1970：47）。

鈴木さんがインタビューに際してまとめてきてくれた資料の一つ、「分校時代（1955年～59年）のひとりの学生が見たこと 貧しかったけれど…されどわが青春」には、鈴木さんが入学した1955年の出来事として、「12月、世田谷分校で、全教ゼミが開かれ、学生新聞の記者として顔を出した。全国から教育系の学生が集まっていること、星野先生などが提案にていねいに対応されていることに刺激を受けた。」と記されている。鈴木さんは当時1年生で小金井分校にいたが、「（大学入学とともに入会した新聞会の活動が）世田谷も小金井も一緒だったものですから（二つの分校を）行ったり来たりしていた」そうだ。鈴木さんは学生新聞の記者としてアンテナを張り、様々な集まりにも取材をかねて参加した。このサークル活動を通して、今も記憶に残るこうした場面に出くわしたといえる。

鈴木さんが言及した「星野先生」については後述することにして、全教ゼミについて急ぎ補足しておきたい。「全教ゼミ」（全国教育系学生ゼミナール）は、鈴木さんが入学される前年（1954年）に産声を上げた。1954年7月の全教学協第3回地区議長会議のゼミ開催の方針をもとに、同年12月、全教学協第4回大会とともにその学科別分科会として神戸大学において第1回全教ゼミが開催された。そこでの討論では、「今学んでいることが卒業後はたして役に立つのだろうか」「本当に子どもたちはどう学べばよいのだろうか」「学生生活がますます苦しくなり、体を悪くして学園を去っていく学友が多くなってきた」「われわれの民主的な権利がだんだん奪われていく」「親の大きな期待と文字どおり骨身をけずるような努力で卒業しても就職できない」等々、切実な悩みや不安が互いに共通のものであることが確認された（伊ヶ崎・土屋編 1978：39）。神戸大学古林喜楽学長や塩尻公明教育学部長の期待と援助も並大抵ではなく、「この第一回ゼミは、学園で孤独になやみつづけた暗き日々から一転して、学生の団結と大学教師の積極的支援という自由な連帯・共同の雰囲気の中かで、みずからの学ぶ意欲と教育への誇りをとりもどそうとするその第一歩となった」と評されている（伊ヶ崎・土屋編 1978：41-42）。

第2回全教ゼミは、1955年12月、「勉学的態度の確立」「教育系学生の交流」という基本目標のもとに、東京学芸大学で開催され、全国82大学1,700余名の参加が得られたと記録されている（伊ヶ崎・土屋編 1978：47）。そもそも全教学協の活動を認めてこなかった東京学芸大学は、これにどう応じたのであろうか。『東京学芸大学二十年史』には次のように記されている。

このゼミナールの第1回大会は、「教育系大学としての学問的、勉学的態度の確立とともに、全国教育系大学生相互の交歓を図る」ことを目的とし、（昭和一筆者注）29年、神戸大学において開かれた。大学は、このゼミナールの性格と活動状況について検討を加えた結果、その存在を一応認めることにし、30年12月18日から22日まで、世田谷・小金井両分校主催で開く予定の第2回ゼミナール大会を許可することにした。この大会には、全国60余の教育系大学の学生およそ1,000名が参加したようである。なお、本ゼミナール大会は、これより会場を変えて毎年1回開くことにし、現在に至っている。ゼミナールの許可は、暗黙裡に全教学協を認めることになったが、その一例として31年5月には、世田谷分校の学生会長が全教学協を代表して、インドネシアのバンドンで開催されるアジア・アフリカ学生会議に出席した。（東京学芸大学二十年史編集委員会 1970：48）

第1回大会の会場校であった神戸大学と比べて、東京学芸大学側の対応は積極的とは言えまい。『東京学芸大学二十年史』の「全国60余の教育系大学の学生およそ1,000名が参加したようである」という伝聞推定表現（その数字も伊ヶ崎・土屋編（1978：47）の記録と開きがある）からも距離感が感じられるが、それでも大学は全教ゼミの活動を「一応認める」姿勢へと軟化した。このように大学当局としては反対はしないまでも消極的姿勢だったと思われる第2回全教ゼミに際し、当時助教授だった星野安三郎などが「提案にていねいに対応されている」ところを、当時1年生だった鈴木さんは目撃していたというのである。これは貴重な証言である。星野安三郎については、鈴木さんへのインタビューに共に同席した木暮が、前々号の本室報で次のようにまとめている。

星野安三郎は大正10（1921）年栃木県出身の憲法学者である。旧制第二高等学校（仙台）を経て昭和18（1943）年東北帝国大学法文学部法学科に入学しすぐに入営することになった。戦後に復員・復学をして昭和22（1947）年に東北帝国大学を卒業。東北大学特設研究科を了し、昭和23（1948）年に、親友の父親であった東京第三師範学校長の田中保房に誘われて同校の講師となる。その後新制東京学芸大学が創立すると、それに伴い東京学芸大学の講師、助教授、教授として研究・教育活動をつづけた。その助教授時代に昭和30（1955）年入学の鈴木さんが出会ったのである。鈴木さんは星野について以下のように記憶されている。「（星野さんは）師範学校なんて行きたくないと思ったんだけど、行ったところ意外に、やや旧制高校の（自由な）雰囲気があるといって気に入られて。」鈴木さんは星野による憲法の授業には特に圧倒され、学部1年生の時に書いていた日記にもしばしばその記述が見られるという。講義の外でも学生の研究会などでたびたび学生を鼓舞する発言をしていたことも記憶していच्छやった。（木暮2020：40-41）

なお、『東京学芸大学二十年史』に記されている「世田谷分校の学生会長」とは、鈴木さんから頻りに名前があがった山崎真秀である。鈴木さんが「まあとにかく山崎さんというのはすごい人だなと思うんですけど、僕感じでは、僕より2年上の先輩たちの山崎さんを取り囲むグループはすごい立派な方で。」と賞賛した山崎真秀について、ふたたび木暮（2020）をもとに補足する。

山崎真秀は昭和5（1930）年に東京に生まれ、第一東京市立中学校（後の東京都立九段高等学校【閉校】）に昭和18（1943）年に入学した。在学中に愛知県刈谷市に疎開し、愛知県の刈谷高等学校を卒業。鈴木さんの疎開していた静岡県磐田郡二俣町（現、浜松市天竜区）と地理的に近いことから、親近感を覚えたそう。その後静岡県の中学校教員、早稲田大学第一文学部哲学科（中退）を経て昭和28（1953）年に東京学芸大学に入学した。鈴木さんよりも年齢では7つ、学年では2つ先輩にあたる。その山崎やその周りの人々の印象はかなり強烈に残っているという。鈴木さんは、インドネシアで開かれたバンドン学生会議に日本の学生代表として派遣された山崎を支援する資金カンパにも協力した。（中略）

その後山崎は憲法学者・法学者として東京学芸大学助手、広島大学講師、北海道大学助教授、東京学芸大学教授を経て、平成6（1994）年まで静岡大学人文学部教授を務めた。（木暮2020：41）

鈴木さんは学生新聞会の取材をかねて、1955年12月に東京学芸大学で行われた第2回全教ゼミに参加しただけでなく、1956年3月10日～12日、長野で開かれた全教学協第5回大会にも参加した。さらに、同年12月19～22日に愛知学芸大学岡崎分校で開催された第3回全教ゼミにも、泊まりがけで参加している。伊ヶ崎・山崎・土屋（1969a）によると、第3回全教ゼミには全国から68自治会、2,000余名が参加し、全教ゼミの性

格・内容が大会報告書に次のように記述されるに至っている。「ゼミ活動は、全教学協及び各自治会の文化活動の一分野として、民主的教育の擁護と発展を目指すものであり、我々は将来すぐれた教師として日本の民主教育の良き守り手となっていくという実践的見地に立って我々の自主的研究を発展させ、学問研究を深め教育科学の確立に寄与していくものである。」(伊ヶ崎・山崎・土屋 1969a: 123-125)

鈴木さんは言った。「(当時の教育系学生は、) 教育に関して、劣悪な環境で一生懸命、こういう環境のなかで。一番感動的だったのは、第1回の全教ゼミナールは僕が入った前の年、神戸大学で開かれたんですけど、そのとき、自分の持っている本を全部売り飛ばして神戸まで旅費にして参加した学生もいたんだって、そういう人が多いわけですよ。」

5. 結論

以上、鈴木禹志さんの語りをもとに、創成期の東京学芸大学における学生生活を記述してきた。その語りは、創成期の大学が何を提供してくれたかという視点を優に超えて、学生が大学という「場」と「時間」を自らどう生き、経験したのかという視点から読み解くことがふさわしいものだった。

「大学における教員養成」を機能させる上で、施設の整備やカリキュラムの充実が求められていたが、創成期の東京学芸大学では十分に達成されていたとは言い難い。それでも、その環境を嘆くだけでなく、それを克服しようと運動した学生もいたし、とりわけ全教ゼミが学生たちの手によって、時に大学と対立しながら、時に大学教員に支持されながら、開催されたことは特筆すべきである。

鈴木さんは、学生新聞会に入っていたこともあって全教ゼミにも参加したし、キャンパス内で面白いといわれる教員や学生の噂を聞けば専攻を超えて会いに行ったり、学外にも「文化の香り」を求めて出かけたりと、自分から行動していた。アルバイトが必要な苦学生であったが、三鷹の喫茶店で過ごしたり、日比谷の野外コンサートに行ったりしたことも、「今になってみればよかったな」と振り返る。学生ならではの時間の使い方と自由を、時に持て余しながらも満喫されていたように思う。そのありがたみを知っていたからこそ、当時の学生たちは、単位や成績で縛られることをきらい、カリキュラムに対する要望としては、「自由選択をひろげる」「専門教科を強化せよ」という声が多かったのではないだろうか。

鈴木さんの語りに耳を傾けると、創成期の大学に集った学生や教員が生み出したインフォーマルな文化やかくれたカリキュラムの重要性を思い知らされる。そのなかで筆者が特に関心を向けたのは、創成期の大学が提供したもののというより、学生の期待に反して大学が提供し得なかったこと、それでも学生が学ぼうと自ら行動したこと、時に大学の枠を超えるような個性を持った大学教員や学生との出会い、そういう者に対する尊敬の念、想像を超えた学びの機会の創出、といった局面の存在と関連性についてである。

このような学びの場の創出には、学生の選択と自由を保障する「余白」や「時間」が必要条件だったのではないだろうか。「文化果つるところ」と表現された創成期の東京学芸大学には、何がなくとも、それらが残されていたと思われる。加えて幸いなことに、鈴木さんのように「(自分が) どうするかということですよ」と考え、行動する学生がいた。これこそ、「大学における教員養成」にとってかけがえのない財産であり、これからの大学改革においても忘れてはならない原点である。

記

- ・本研究は、JSPS 科研費 18K02411 の助成を受けたものである。
- ・調査にご協力くださり、貴重なお話を聴かせてくださった鈴木禹志さんに記して感謝する。鈴木さんは、本稿の草稿にも目を通してくださった。

参考文献

- 伊ヶ崎暁生・土屋基規 1978 『未来の教師 教育系学生と全教ゼミナール運動』労働旬報社
- 伊ヶ崎暁生・山崎真秀・土屋基規 1969a 『教育系学生の思想と行動（上）』明治図書
- 伊ヶ崎暁生・山崎真秀・土屋基規 1969b 『教育系学生の思想と行動（下）』明治図書
- 陣内靖彦 1999 「序章 時代と社会背景」東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会『東京学芸大学五十年史 通史編』東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会
- 金子真理子編 2011 『教員養成カリキュラムの検証—創成期の本学卒業生に対するインタビュー調査をもとに—〈報告書〉』東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター
- 金子真理子 2021 「『大学における教員養成』の原点—創成期の東京学芸大学の営みに注目して—」東京学芸大学大学史資料室『東京学芸大学大学史資料室報』Vol.8：2-9
- 金子真理子・早坂めぐみ 2020 「創成期の東京学芸大学と学生生活：学生対象質問紙調査から見えてくるもの」『東京学芸大学学紀要 総合教育科学系』71：507-521
- 木暮絵理 2020 「鈴木禹志さん聞き取り調査報告」東京学芸大学大学史資料室『東京学芸大学大学史資料室報』Vol.7：35-43
- 東京学芸大学 1952 『東京学芸大学カリキュラム』
- 東京学芸大学 1956 『新入学学生に関する調査』
- 東京学芸大学 1957 『新入学学生に関する調査』
- 東京学芸大学大学史資料室 2018 『東京学芸大学史テキスト』
- 東京学芸大学教務補導部 1959a 『学生生活実態調査報告』
- 東京学芸大学教務補導部 1959b 『学生生活実態調査報告（別冊）』
- 東京学芸大学二十年史編集委員会 1970 『東京学芸大学二十年史』

女子師範学校関係資料 解題

牛木純江（大学史資料室専門研究員）

1. はじめに

「女子師範学校関係資料」は、資料群「東京学芸大学五十年史資料目録」¹のうち、東京学芸大学の前身校の一つである東京府女子師範学校（以下、女子師範学校）に関係する資料である。「女子師範学校関係資料」の母体となっている「東京学芸大学五十年史資料」は、東京学芸大学が新制大学として創成してから50周年を迎えた1999（平成11）年に、創立50周年記念事業の一環として刊行された『東京学芸大学五十年史』の編纂のために収集されたものである。編纂後、収集された資料は附属図書館に保管されていたが、2012（平成24）年に大学史資料室開室の際、資料室に移管された。

「東京学芸大学五十年史資料目録」は、以下の通り分類・整理されている²。

- A. 青山師範学校（第一師範を含む）
- B. 豊島師範学校（第二師範を含む）
- C. 女子師範学校
- D. その他の師範（第三師範、東京青年師範）
- E. 東京学芸大学
- F. 附属図書館（学芸大学及び師範学校）
- G. 附属学校（学芸大学及び師範学校）
- H. 東京都内学校
- I. アルバム
- J. 教育学部通信教育
- K. その他

※上記のうち、A・B・Dに関してはすでに目録公開済み

この中の「C. 女子師範学校」の資料の詳細目録を作成し、2021（令和3）年12月に、新たに「女子師範学校関係資料」目録の公開および閲覧を開始したのである。

「女子師範学校関係資料」の総点数は143点で、最も古いもので開校直後の1903（明治36）年から、官立化され東京第一師範学校女子部となる直前の1943（昭和18）年までの資料が確認できる。また、女子師範学校に併設された東京府立第二高等女学校（以下、第二高女）関係の資料も含まれている。その内容は、校友会誌や同窓会誌のほか、歌集や修学旅行記など女子師範学校の教育・文化活動や生活などをうかがい知ることができるものであり、師範学校研究および戦前の教員養成史研究にとって重要な資料であると思われる。なお、先に記した通り、本資料群には第二高女関係の資料も含まれているが、女子師範学校と第二高女は校地を共有しており、教職員も兼務で、学校行事なども合同で開催し、校友会も合同で設置されていた。資料的にこの二校を別々に分類するのは難しいため、両校の資料を合わせて「女子師範学校関係資料」と名称し、一つの資料群とすることとした。

以下、本稿では、女子師範学校の歴史について概観し、「女子師範学校関係資料」についてその概要を紹介する。

2. 東京府女子師範学校について

東京学芸大学の創基は、1873（明治6）年に開設された小学教則講習所である。小学教則講習所は、現職の小学校教員に対して小学校教育に必要な新たな知識や技術を教授する講習が中心であった。その後1876（明治9）年に師範生徒を対象とした教員養成のための教育機関である東京府小学師範学校となり、同年に東京府師範学校と改称した。この年の12月に初めて女子の師範生徒を募集し、1878（明治11）年、1879（明治12）年に卒業生を輩出したが、募集を停止したことにより、1880（明治13）年以降、東京府師範学校に女子生徒はいなかった。この時期の、東京府下における小学校の女性教員の主な供給源は、検定試験合格者や府立高等女学校の師範科（補習科）の卒業生であった。

東京府における独立した女子師範学校である東京府女子師範学校が開校したのは、1900（明治33）年のことである。この女子師範学校は、1897（明治30）年の「師範教育令」公布による師範学校拡充および男女別の師範学校設置の方針に基づき、東京市小石川区竹早（現在の文京区小石川）に設置された。1900年当時全国において、独立した女子師範学校は東京府女子師範学校のほかに、大阪府女子師範学校、新潟県女子師範学校しかなく、最も早い設立校の一つであった。なお小石川区竹早には、もともと東京府師範学校（後の東京府青山師範学校）が設置されていたが、赤坂区青山北町に移転したため、校地・校舎とも跡を引き継いでの開校であった。また、附属小学校も、それまでの東京府師範学校附属小学校が、在籍児童・校舎・校具など全て東京府女子師範学校附属小学校として移管された（現在の東京学芸大学附属竹早小学校）。そして、女子師範学校の設立と同時に、東京府立第二高等女学校が併置された。1904（明治37）年には、附属幼稚園が設置された（現在の東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎）。女子師範学校の開校当時の修業年限は3年であった。

1907（明治40）年の「師範学校規程」の制定に基づき、1908（明治41）年2月には学則が改正された。本科を第一部・第二部に分け、第一部は入学資格を高等小学校卒業者とし、修業年限を4ヶ年（修業年限1年の予備科も設置）とした。1911（明治44）年に設置された第二部は、入学資格を高等女学校卒業者とし、修業年限を1ヶ年とした。このことにより修業年限が3年から第一部では予備科も含め5年に延長され、新たに第二部が設置されることにより、女子の教員養成の体制が形作られた。この修業年限であるが、1924（大正13）年の「師範学校規程」の改正を受けて、1925（大正14）年に予備科が廃止となり本科第一部の年限を5年に、1931（昭和6）年の「師範学校規程」改正により、本科第二部の年限が2年にそれぞれ変更された。なお、1908（明治41）年時点の卒業者の服務年限は第一部公費生が5ヶ年、第一部私費生が3ヶ年、第二部生は2ヶ年であった。

1910（明治43）年は創立10周年にあたり、生徒と教員で構成される校友会が結成され、会報も発刊された。また女子師範学校同窓会の会報も同年第一号を発刊した。

師範学校では、通常の授業のほか、遠足、学芸会、運動会など、様々な行事が行われていた。1915（大正4）年5月からは、3年時に日光、4年時に関西へとそれぞれ修学旅行も行われるようになる。生徒自身の手で旅のしおりや修学旅行の報告記が作成された。校友会のもと、部活動も盛んに行われ、陸上競技や籠球部などが強かったようである。

1930年代には、老朽化していた校舎の建て替えが行われ、それまで木造だった校舎は、1935（昭和10）年には鉄筋3階建ての新校舎となった。同時期に体育館や寄宿舎などの改築も行われた。1930年代後半になると、女子師範学校の教育も年々戦時色が強くなり、体操の時間に軍事訓練が行われるようになったり、慰問袋の献納や軍需品の作成なども行われた。1941（昭和16）年には、それまでの校友会を解散し、竹早報国団および竹早報国隊が結成された。

1943（昭和18）年4月に師範学校令が改正され、官立に移管され、女子師範学校は東京第一師範学校女子部となった。

3. 「女子師範学校関係資料」の概要

「女子師範学校関係資料」は、前述のとおり資料総数が143点である。これらの資料は、分類や整理が行われておらず、また小資料群があるわけでもない。2019年に公開した「撫子会保存資料」³のように東京府豊島師範学校・東京第二師範学校の同窓会組織が収集し、分類・整理がされているわけではないし、2020年に公開した「青山師範学校関係資料」のように、「特定の行事やテーマ、元の所有者毎に小さな資料群がつくられ、それに入らない他の細々した資料が合わさった形で資料群が構成されている」⁴わけでもない。おそらく特定の意図があって資料が順序づけられているのではなく、収集順など資料の特徴とは無関係に並べられているのではないかと推察される。

以下、収集されている資料に関して、その内容別に特徴を紹介していく。

○同窓会誌 36点

- ・東京府女子師範学校同窓会『会報』（1910～1942年）
- ・東京府立第二高等女学校内篁会『たかむら』（1922～1942年）
- ・東京府立第二高等女学校同窓会『会報』（1914～21年）

最も多く収められているのは、同窓会の会誌である。女子師範学校の同窓会『会報』と第二高女の同窓会組織である篁会の会報『たかむら』、第二高女同窓会『会報』があり、それぞれ論説、「文苑」（文学）、「雑録」（エッセイ）、消息、近況報告、会員名簿などが掲載されている。女子師範学校及び第二高女卒業後の状況等が分かる貴重な資料である。

○校友会・竹早報告団関係 28点

- ・東京府女子師範学校校友会『会誌』（1911～1914年）
- ・東京府立第二高等女学校校友会『会誌』（1911～1917年）
- ・東京府立第二高等女学校校友会『会誌』第6号（1917年）
- ・東京府女子師範学校校友会『呉竹』（1915～1921年）
- ・東京府女子師範学校・東京府立第二高等女学校校友会『校友会誌』（1926年）
- ・東京府女子師範学校・東京府立第二高等女学校校友会『たけはや』（1927～1942年）
- ・東京府女子師範学校・東京府立第二高等女学校竹早報団『竹早』（1943～1944年）

続いて多く収められているのは、校友会会誌である。校友会は1920年代半ばまでは、女子師範学校と第二高女のそれぞれで組織化されていたようであるが、1920年代後半になると、二校合同で組織化されたようである。また1943年になると、校友会から竹早報団となった。「女子師範学校関係資料」には、それぞれの学校、合同時代、竹早報団時代の校友誌がそれぞれ残されている。内容は、時期によって若干の変化があるが、修養や論考、文芸、各部活等の活動報告が掲載されている。女子師範学校は運動系の部活動が盛んであり、これらの資料からはその活動記録などを追うことができる。

○第二高女補習科および女子師範学校寄宿舎等の歌集 27点

- ・東京府女子師範学校本科第二部第1学年『歌集 わかたけ 第2輯』(1936年)
- ・東京府女子師範学校寄宿舎『歌集ひさかた』(1938～1939年)
- ・東京府第二高等女学校補習科『歌集 遠志』(1938年)、『歌集 つゆくさ』(1939～1940年)、『歌集 ゆきやなぎ』(1940年)、『歌集 くにたみ』(1941年) ほか

「女子師範学校関係資料」には、歌集も多く収められている。ここに収められているのは、第二高女補習科や女子師範学校寄宿舎で出されたもので、その多くは1930年代後半から1941年までのものである。第二高女および女子師範学校において、詩歌に親しむ文化が根付いていたことが推し量られる。

○修学旅行記等、旅のしおり 14点

- ・東京府女子師範学校第4学年甲組『大正五年四月 第二回近畿旅行報告』(1916年)
- ・東京府女子師範学校『大正九年 関西旅行記』(1920年)
- ・東京府女子師範学校『北の旅 昭和十一年 二部二年』(1936年)
- ・東京府女子師範学校第二部2年『蝦夷地への旅』(1937年)
- ・東京府第二高等女学校『旅行記 2599』(1939年) ほか

「女子師範学校関係資料」の中で特徴的なのは、修学旅行記が数多く収められていることである。前述したが、女子師範学校で修学旅行が始まったのは、1915(大正15)年5月であった。ここには、1916年の修学旅行開始直後の時期のものから、1930年代後半の時期のものまで幅広く所収されている。これらの資料の多くは生徒たちの手による手書きの紀行文で、挿絵や故事、詩歌なども書き込まれている。年代による旅程の変化も含め、当時の師範学校の修学旅行の実態を知ることのできる、貴重な資料であると言える。

○その他 38点

- ・『東京府女子師範学校・東京府立第二高等女学校概要』(1942年)
- ・『東京府女子師範学校 東京府立第二高等女学校一覧表』(1943年)
- ・『東京府女子師範学校・東京府第二高等女学校校友会名簿』(1936年) ほか

上記のまとまった資料以外に、個別の資料が存在する。校友会名簿や学校の概要のほか、生徒の手によるスクラップブックなどもある。

おわりに

「女子師範学校関係資料」は、女子師範学校および第二高女の歴史のみならず、師範教育史(特に、女子の師範教育史)や日本近代教育史に関する資料が多々所収されている。多くの方々に広く利用されることを期待したい。

今回公開した「女子師範学校関係資料」には含まれていないが、資料室では女子師範学校の卒業記念アルバムも多数所蔵している。「女子師範学校関係資料」と併せて広く活用いただけるよう、今後、整理・公開作業を進めていきたい。

注

- 1 「東京学芸大学五十年史資料目録」の来歴等詳細に関しては、小正展也「東京学芸大学における資料収集の現状と課題」『国際シンポジウム報告書 師範学校アーカイブズの現状と課題—20世紀東アジアの教育と向き合う—』（2018年3月、pp.55-64）、木暮絵里「青山師範学校関係資料 解題」『東京学芸大学大学史資料室報』7（2020年、pp.6-10）に詳しい。
- 2 以下の文類は、前出小正論文より転載。
- 3 『撫子会保存資料』の詳細については、小正展也「撫子会保存資料 解題」『東京学芸大学大学史資料室報』6（2019年、pp.9-14）参照のこと
- 4 『青山師範学校関係資料』の詳細については、木暮絵里「青山師範学校関係資料 解題」『東京学芸大学大学史資料室報』7（2020年、pp.6-10）参照のこと

参考文献

- 東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史』1970年
東京学芸大学創立五十周年記念誌編集委員会編『東京学芸大学五十年史—通史編』東京学芸大学創立五十周年記念事業後援会、1999年
陣内靖彦『東京師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会、2005年

大学史資料室の新たな試み

— 閲覧スペースの開設および常設展示の開始について —

牛木純江（大学史資料室専門研究員）

1. はじめに

東京学芸大学大学史資料室（以下、資料室）は、附属図書館・教職大学院棟の増築に伴い、附属図書館3階に場所を得て、2021年6月に移転をした。これまでは、東6号館2階に事務室・閲覧室と資料の一時保管室の2室であったが、このうち事務室・閲覧室を移転したのである。この移転を機に、資料室の環境整備を行い、閲覧スペースを開設し、常設展示を開始した。ここではその概要について報告する。

2. 閲覧スペースの開設

2021年6月の移転後、閲覧スペースの開設および常設展示の開始に向けて、環境の整備を行った。資料室内と展示ケース内にデータロガーを設置し、温湿度および照度、UV強度の測定を開始し、南側の窓にUVカットフィルムを貼付し、紫外線対策も行った。閲覧や常設展示開始に向け、環境上問題ないことを確認した上で、2021年10月より、閲覧スペースをオープンした。開室時間は平日10時～16時で、開室時間中は基本的に扉を開放しており、誰でも訪れることができる場所となっている。閲覧席は3席で、うち1席にはパソコンを設置しており、大学史資料室収蔵資料の公開目録やキャンパスツアー動画「再発見！キャンパスからよみとく学芸大」などの閲覧ができるようになっている。また、現在は新型コロナウイルス感染症対策のため、各席の間にパーティションを設置している。

閲覧を希望する資料については、資料室ウェブサイトの「公開資料目録と閲覧のご案内」ページに掲載している目録を確認し、事前に予約手続きの上、資料室内にて閲覧可能な形となっている。また、閲覧席と反対側の書棚には、資料室の刊行物（『室報』など）や所蔵書籍・資料の一部があり、資料室内限定で予約なしで自由に閲覧することができる。



【写真1】 閲覧スペースの様子



【写真2】 閲覧スペース書棚

3. 常設展示について

常設展示の計画

資料室では、例年、年に一度1～2週間程度の企画展示を行ってきた。資料室の移転に伴い、常設展示を行うことができるスペースを得たことで、2021年10月から常設展示を実施することとなった。

この常設展示だが、2年サイクルで、年ごとにテーマを設定し、1年間の内4～12月を3期（4～6月、7～9月、10～12月）に分けて実施することとした。年間テーマおよび期間ごとの小テーマは【表1】を参照いただきたい。年間テーマは、1年目が「師範学校の歴史をふり返る」で、2年目が「東京学芸大学のあゆみ」であり、2年間で本学のあゆみに基づいた戦前から戦後にかけての教員養成の歴史をたどることができる構成になっている。なお、1～3月の「パネル展示」期では、固定の展示をせずに、その時々に合わせて資料室や大学の刊行物などを展示する予定である。2021年1～3月の間は、資料室刊行物『大学史資料室報』を創刊号から第8号までを展示ケース上に配置し、自由に手に取って読むことができる形で展示を行った。

【表1】 常設展示年間および期間テーマ

| 年・年間テーマ | | 時期 | | | |
|---------|-----------------------------|----------------------------------|-----------------------|------------------------|-------|
| | | 4～6月 | 7～9月 | 10～12月 | 1～3月 |
| 1年目 | 【年間テーマ】 師範学校の歴史を 振り返る | 展示①東京における 師範学校の成立 | 展示②師範学校の展開 と戦時下の様子 | 展示③師範学校における 学びと生活 | パネル展示 |
| 2年目 | 【年間テーマ】 東京学芸大学の あゆみ | 展示④東京学芸大学の 創設とキャンパス の移り変わり | 展示⑤附属学校・園の あゆみ | 展示⑥東京学芸大学に おける学びと生活 | パネル展示 |

常設展示の内容について

今年度の常設展示は、2021年10月15日（金）～12月24日（金）の期間に行った。「師範学校における学びと生活」をテーマに、東京学芸大学の前身である師範学校時代において、どのような学びや教育が行われ、師範学校の生徒たちはどのような生活を送っていたのかについて、当時の授業や課外活動、寄宿舎生活などの資料や画像から読み解くという内容である。

展示ケースには実際の資料を展示し、壁際の手帳では写真パネルを中心とした展示を行った。展示ケース内には、東京第一師範学校の『学級日誌』や師範学校の卒業アルバム、東京府女子師範学校の生徒たちが自分たちで執筆・編集をした修学旅行のしおりなどを展示した。修学旅行のしおりのうち、『大正九年関西旅行記』については、観覧者が実際に資料の内容を手にとって見るできるように、原文を写真撮影し複写したものを展示ケース脇の棚の上に置いた。



【写真3】 常設展示の様子①



【写真4】 常設展示の様子②

2021年11月15日(月)～19日(金)の期間は、特別展示期間とし、東京府豊島師範学校の学生服、学帽、柔道着、水着を展示した。これらの衣服を実際に着用している当時の雰囲気がわかるように、ケース上部に当時の写真パネルも配置した。特別展示期間中、通常展示期の展示物については、ケース横の棚の上に展示物の写真を置き、通常期の展示も見るようにした。

書棚の写真パネル展示だが、師範学校での学習や生活の様子ができるような写真を配置した。書棚4台の内3台を展示スペースとして使用し、右側の書棚は上

二段が師範学校における授業の様子（東京府青山師範学校一以下、青山師範・東京府女子師範学校一以下、女子師範）、下の段が部活動について（青山師範・サッカー部）を配置した。真ん中の書棚の上の段には、教育実習の様子（女子師範）、真ん中は運動会の様子（女子師範）、下の段は師範学校の資料ではないが、本学卒業生の鈴木禹志（すずきひろし）さんが本学の運動部について取材・編集・発行を行っている『学大スポーツ』（2005年～現在）を配置した。左から二番目の書棚は、師範学校での寄宿舎生活についての様子（青山師範、女子師範）のパネルを配置した。一番左側の書棚には、大学史資料室が所蔵している冊子や書籍を配置している。

壁には図書館1階にあるNote caféに毎月掲示させていただいている「今月の學藝アルバム」を並べて展示した。今年度の「今月の學藝アルバム」は、小金井キャンパスの移り変わりをテーマに、キャンパス内のさまざまな建物・施設などの今とむかしの様子が見られる写真を掲載している。

常設展示期間中の来室者数は、のべ159人であった。新型コロナウイルス感染症対策のため、学外者の入構制限をしているため、来室者の多くは学生や教職員であった。来室者の中には、大学史資料室自体の存在を知らなかったという人もあり、常設展示を通じて大学史資料室の活動について認知を高める一助になったといえよう。博物館関係の授業での展示観覧もあり、学生からは大学の歴史や資料の保存・展示等について多くの質問も寄せられた。また、室内に常設展示に関する意見や感想を自由に書いてもらうためのスペースを用意しているが、そこには、「昔の学校の姿や今と重なる行事の様子が見られてとても勉強になります。学芸の事を好きになります」、「複製物があって実際に見てみるのがよかったです」、「教育の歴史に触れ、教育の未来を考える時間。そんな空間の今後も楽しみです」、「当時の学級日誌や教育実習など、様々な面で今とのちがいを見ることができ、たいへん興味深かったです。この貴重な資料を、これから学芸大で学ぶ多くの学生に見ていただきたいです」などさまざまな感想が記されている。特に、修学旅行記の現物および複写展示に対する感想が多く、複写を実際に手に取って読むことができる工夫は今後も継続していきたいと考える。一方で、展示スペースに限りがあるため、師範学校の全体像を系統的に示すことが難しく、もう少し工夫が必要である。今後の課題としたい。

4. おわりに

資料室は2022年4月で開室10周年を迎える。その節目の時に、より開かれた、機能的な形で閲覧スペースをリニューアルし、新たに常設展示を開始することができた。現在は新型コロナウイルス感染症の影響により、資料の閲覧や常設展示の観覧も限定的な形となっているが、今後学内外の方々の研究・教育活動に広く活用していただけるよう、資料の収集・管理およびその提示・展示の方法について、検討を重ねていきたいと考えている。

令和3年度活動報告

〔主な活動・成果〕

- ・ 大学史資料室今後の計画の策定
- ・ 室員会議（11回）
- ・ 運営委員会（3回）
- ・ 大学史資料室事務室・資料閲覧室の移転、開設および運営
- ・ 「女子師範学校」資料群の目録と資料の公開
- ・ 「その他師範学校」資料群の目録と資料の公開
- ・ 常設展示会の開催（R3.10.15～12.24）
「學藝アルバム 師範学校の歴史をふり返る 師範学校における学びと生活」
- ・ 「今月の學藝アルバム」を Note café にて展示および Web ギャラリーにて公開
- ・ 博物館実務実習の実施
- ・ 大学史資料室案内リーフレットの配布
- ・ 大学史資料室報（Vol.9）の発行
- ・ 旧師範学校アーカイブズシステムの運用（継続）
- ・ 情報発信用外部サイト「東京学芸大学大学史資料室 Web ギャラリー」の運用（継続）
- ・ 資料環境の維持（継続）
 - 大学史資料室保存環境調査報告（1回）
 - データロガーの設置による温度・湿度の測定
 - フェロモントラップの設置による虫害虫の捕獲調査
 - 微生物センサによる浮遊菌測定
- ・ 50年史関連資料の目録作成（継続）
- ・ 資料の収集
 - 「附属幼稚園小金井園舎」関係資料
 - 「附属小金井小学校」関係資料 等
- ・ 資料のデジタル化

〔委員会等及び委員名簿〕

運営委員会

- | | |
|---------|----------------------|
| ◎ 川手 圭一 | 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授 |
| 君塚 仁彦 | 総合教育科学系学系長・教授 |
| 加賀美 雅弘 | 人文社会科学系学系長・教授 |
| 國仙 久雄 | 自然科学系学系長・教授 |
| 及川 研 | 芸術・スポーツ科学系学系長・教授 |
| 金子 真理子 | 次世代教育研究センター教授 |
| 服部 哲則 | 自然科学系講師 |
| 関田 義博 | 附属学校運営部運営参事 |
| 東 高之 | 総務部長 |

◎は委員長

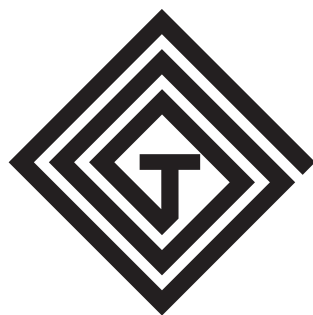
室員会議

- | | |
|---------|----------------------|
| ◎ 川手 圭一 | 副学長・附属図書館長・人文社会科学系教授 |
| ○ 君塚 仁彦 | 総合教育科学系教授 |
| 及川 英二郎 | 人文社会科学系教授 |
| 椿 真智子 | 人文社会科学系教授 |
| 日高 智彦 | 人文社会科学系准教授 |
| 新免 歳靖 | 自然科学系講師 |
| 服部 哲則 | 自然科学系講師 |
| 金子 真理子 | 次世代教育研究センター教授 |
| 牛木 純江 | 専門研究員 |
| 高井 力 | アーカイブ室長 |

◎は室長 ○は副室長

東京学芸大学大学史資料室報 Vol. 9

令和4年3月31日発行
東京学芸大学大学史資料室
東京都小金井市貫井北町 4-1-1
メール：shiryou@u-gakugei.ac.jp



東京学芸大学
大学史資料室

Office of Tokyo Gakugei Univ. Archives

